財團法人明治聖德記念學會紀要　第廿卷

研究

言葉と文字にあらはれた我が國民性

安藤正次

一

言葉といふものは、或集合觀念をあらはす叫聲や、悲喜驚異の情に刺激されて反射的に發する感聲などとは、普通に區別して考へられる。言語學者は、われ〳〵の思想が有節的に音聲でいひあらはされたものが言語であるといふやうな定義を下してゐる。有節的といふのは、節調ある義であつて、具体的にわかりやすくいへば、單なる聲でなく、母音子音などが或種の排列順序を以て發音されることを意味する。しかも、かくの如き音の或種の排列によつてあらはされる思想は、論理的の分拆と綜合とを經たる

結果の所産であつて、叫聲や感聲によつてあらはされるやうな一時的昂奮の情の如きものでは無い。されば、その言葉を用ゐる人々の思想や性情の傾向は、言葉の上に著しくあらはれてゐる。然もまた、言葉は人類相互の間に於ける思想交通の方便として最も廣く最も普通に用ゐられるものであるから、發音の上にも語彙の上にも語法の上にも、その言葉を用ゐる社會の好惡習癖が極めてよく反映する、「言葉は國の手形である」といふことは、我が國で古くからいはれてゐる言であつて、その意味はお國訛りはあらそはれないもので、言葉をきけばおのづからその生國がわかるといふのであるが、これは、もつと廣い意味につかつてもよいので、言葉といふものの觀察によつて國民性がうかゞはれるといふことにもなるのである。

通常、世人は一般に言葉を單にその外にあらはれた形のみについて觀察する。無論いかなる場合に於ても、言葉にはその言葉によつていひあらはされる意義といふものが結びついてゐるのであるが、多くの人々は言葉を音と意義との二つにわけて考へるといふことについてすら無關心である場合が多い。況んや、その意義が如何にしてその音と結びつくやうになつたか、その意義が如何にして構成されたかといふやうなことについては、ほとんど考へることが無いといつてよい。例へばわれ〳〵が「つくる」といふ言葉を話したり聞いたりする場合に、何人もその言葉の音と義との關係について精密な考察を加へてから話したり聞いたりするといふ態度には出ない、哲學的や科學的の討議を試みるやうな場合には、

その用語についてその内容をまづ吟味してかゝるといふやうなこともあるが、それにしても、それはその言葉によつてあらはされる内容の問題が主となるのであつて、音關係の方面には殆ど沒交渉であるのが普通である。況んや通常一般に使用されてゐる「つくゑ」といふやうな言葉の場合に於ては音の關係も義の關係も全然問題にされないのが普通である。しかし、一歩退いてこれを考へると、何故に、われ〳〵日本人は机といふ概念をあらはすに「つくゑ」といふ音の一團をもつてするか、何故にイギリス人はテーブルとかデスクとかいふ音の一團を以てこれをあらはすかといふことを考へてみると、そこに疑問が生じてくる筈である。この疑問は通常「國語の相違」といふことで解答を與へられるが、この疑問は更に何故に國語の相違が生ずるかといふことの解決によつてはじめて適當に解釋されるのである。此の点について今日の學者の多くが一致してゐる意見は、國語の相違は、その國語を語る民族や國民の慣性の相違に本づくものであるといふことになつてゐる。言葉といふものは、元來人類相互が思想を交通する方便として用ゐられるものであるから、或音の一團に或意義を結びつけてこれを言葉として用ゐるといふのは、或社會の意識的または暗默的の約束によつて成立つのである。國語や方言の上では、この約束の關係が悠久の過去から今日に及ぶ久しい間のものとなつて居り、またその範圍もあまり廣汎にわたつてゐるので一寸一般の人にはわかりにくゝなつて居るが、これは、或社會や或團体の間に行はれてゐる隱語や符牒の例で考へれば、容易に理解される。もつとも隱語や符牒には他の社會や團体に通じな

いやうなものを選ぶといふ特殊の傾向も加はつてはゐるが、大体に於て、その約束關係であることに於ては、普通の言葉と同樣である。その隱語や符牒のこれによつてあらはされる内容との聯想的の結びつきが、社會や團体を異にするにしたがつてさま〴〵に異なつてゐる。これは畢竟その社會や團体を組織してゐる人々の考へ方の習慣が異なり、聯想や經驗の範圍がちがふからである。これは廣く一般的に、國語や方言の場合にも推及ぼして考へることが出來るのである。人類がそれぞれ別々の集團生活をなし、異なる社會を形成して長い年月を經過する間には、その集團その社會にはそれ〴〵別々の習慣といふものが出來てくる。同じ家から別れたもの、所謂別家といふものが、そのはじめは本家と同じやうな生活樣式を奉じてゐても、次第々々にまた別家は別家の生活樣式を發達させて行き、家風といふやうな精神的の方面のものまでも本家の家風とは異なつたものとなつて行くことが多いのは、現今の社會に於ても普通に認められるところである。もと同一民族であつたものが相分れて別々の國民となり、一國民が地方的に分れて社會生活を營んでゐる結果、そこに國民的地方的の特異性が發達してくるのは當然のことである、言葉の中にあらはれてくる寫聲的成分のごとき、自然の音を摸倣したものであるから、各民族各地方を通じて同樣であるべき筈であるのに、それでさへも、民族や地方の異なるにしたがつて、さま〴〵の相違があるといふことは、雄辯にこの眞相を物語つてゐる。かういふ風であるから、考へ方や聯想の習慣の相違してゐる民族や國民の間には音と義との間の關係にもそれ〴〵の特異性が發達してくる。

日本人が机といふ概念をあらはすに「つくゑ」といふ言葉を以てし、イギリス人がテーブルもしくはデスクといふ言葉を以てするのは、つまり聯想の習慣の異なるためであるといふことが出來る。音と義との間には必然的の關係は無いのであるから、もしわれ〳〵の祖先が「つくゑ」といふ音の一團を以て机の概念をあらはさないで「いす」といふ音の一團を以てしたならば、今日のわれ〳〵は「いす」といふ言葉を以て机をいひあらはしてゐる筈である。たゞ「つくゑ」といふ言葉が最初に用ゐられ、社會一般に認容され來つてゐるから、この語が現に確乎たる存在性を有してゐるのである。社會の人々の考へ方や聯想の習慣が變れば、言葉もかはつて來る。以前に用ゐられてゐた言葉が行はれなくなつて、死語とか廢語とかいはれるものが出來るが、それは即ちもはや社會の慣用から見捨てられたものなのである。これに反して、社會の狀態が變つてくると、從來の語彙だけでは新時代の人々の思想感情が十分にいひあらはされ得ないといふやうな事情が出來て來る。こゝに於て新語が生ずる。死語とか新語とかいふのは、單に單語についてのみいふべきことでは無い。廣く、思想發表の形式や措辭法などについてもいひうべきことである。それ等のものも、民族や國民や地方の異なるにしたがつて異なり、時代の變遷と共に推移する。然もまた、他の方面から見れば、語彙に於ても措辭法に於ても、その外形即ち音韻が時代的地方的に異なると共に、その內容即ち意義もまた時代的地方的に異なる。その意義の相異といふのにも、さま〴〵のものがある。例へば「氣の毒」といふ語は、江戸時代には、本來の語義通りに「心を痛

める」「氣を損ずる」「こまる」といふやうな意味で、自他兩樣に用ゐられてゐたが、後には他人に對して同情を表する場合にのみ「御氣の毒さま」といふやうな風に用ゐられるやうになつた。「赤帽」といふ語は元來、昔の近衞兵をあらはす言葉として用ゐられはじめたものであるが、今日では停車場の荷物運搬夫の別稱として用ゐられてゐる。「つくゑ」といふ語も、その內容が漸次擴充されて來てゐる。昔の人が、「つくゑ」といふ語によつて把住した概念と、今日の人が「つくゑ」といふ語で代表せしめてゐる概念との間には非常な相違がある。今日のやうに洋風生活の廣く行はれるやうになつた時代の人々は、「つくゑ」といふ語を非常に廣い範圍の同類のものに適用して考へる。これは、生活狀態、社會事象の變遷に伴ふ相違である。なほ、同時代の人々でも、都會居住のものと、山間僻村のものとの間には、やはりかういふ風の相違が、智識や生活の程度の相違から生じて來る。以上述べたところは、わづかに意義の變化の一二について說明を下したに過ぎないけれども、これだけの例から見ても、言葉と民族生活、社會生活との關係は明らかに察せられることと思ふ。

言葉といふものは、單に機械的にわれ〳〵の思想感情の發表傳達の用をなすものではない。言葉といふものは、實にその言葉を語る民族なり國民なりの精神の一のあらはれであつて、われ〳〵はこれによつて、その民族、國民の考へ方、心のもち方をうかゞふことが出來るのである。言葉は實に過去現在にわたつて生きて働く力をもつてゐるものである。三千年の悠久な時代を通じて、今日のわれ〳〵と、

過去の祖先とを精神的に結びつけるものは言葉である。また、方處を異にしてゐるわが同胞七千萬を一つに結びつける大きな力をもつてゐるものも言葉である。同じ言葉を共通の母語としてゐるといふことは、單にその言葉を理解することが出來るとか、その言葉を語り得るとかいふのとは異なる。そこに大なるなつかしみがある、そこに大なる力がある。われ〳〵は、言葉を使用するとかつかふとかいつて、言葉に對して主人公たるが如き感じをもつてゐるが、事實に於てわれ〳〵は言葉の使用についてその主たる如き地位に立つこともあるけれども、一方に於て、われ〳〵はまた、言葉のために多大の恩惠を蒙つてゐる、ことを忘れてはならぬ。思想、精神、考へ方の上に於ける言語の訓練の力は實に偉大なものである。多くの人はこれを輕々に看過してゐるけれども、言語の、われ〳〵の思考の上に及ぼす影響は實に多大である。かういふ点から見ても、言葉と國民性との關係は注意されなければならぬのである。

二

國語の上にあらはれた國民の性情を觀察しようとするに當つて、まづわれ〳〵の注意すべきものは、國語の本質的特性と第二次的特性とを明らかに區別することである。本質的特性といふのは、つまり靜的のものといつてもよいので、要するに過去現在を通じて變らないものである。第二次的特性といふのは、換言すれば動的のもので、動いてやまざる部分のもの、要するに常に動きつゝある、その動き方に見出される特性をいふのである。

國語の本質的特性として擧ぐべきものは何であるかといふに、その著しい点だけについていへば、第一に、國語は言語學上附着語といはれる性質を有つてゐること、即ち語法上の關係が、助動詞や助詞や接頭語、接尾語などによつて示されること、第二に、國語は多音節語であること、即ち支那語などは概していへば一語一音節であるが、國語は一語が數音節から成立つてゐるものが多いこと、第三に、國語の音節は開音節であること、即ち音節が母音に終つてゐるのと、第四に、國語の語詞排列の順序、換言すれば考へ方の順序が主語客語述語といふ次第になつてゐることなどが數へられる。かういふ風な特性はわが民族が民族を形成する時代に發達させたものであつて、この言語上の特性は、他の外來の勢力のために容易に變改されるものではない。然しどうしてかういふ特性が發達するに至つたかは、國語の系統的關係と關聯してゐる問題であつて、その解決は容易では無い。國語がウラルアルタイ語系に屬するものであるか、またウラルアルタイ語系に屬するものであるとしても、そのいかなる分派に屬するものであるか、或は朝鮮語と日本語とは、ウラルアルタイ語族中の獨立の一分派を形成するものであるかといふやうなことについては、種々の議論がある。然し、それがいかに解決されるにしても、わが國語を周圍の諸民族の言語と比較して見ると、その特性の或ものは、或は朝鮮語に、或は蒙古語に、或は滿州語に、それ〳〵の類似を見出すことが出來るけれども、全体としては、わが國語にはおのづから他の諸國語と異なる特性がある。これが即ちわが國語の系統的所屬問題を困難ならしめる一の理由と見るべきも

のである。上に擧げた本質的特性の四項目は單に抽象的に大綱を示したに過ぎない。特性を明らかに知らうとするには、どうしても、更に深くその内容に立入つて考へなければならぬ。語法上の關係が助動詞、助詞、接辞等によつて示されるとしても、それ等の成分がどういふ風に結びつけられるか、それ等の成分の組立はどういふものであるかといふやうな点に、おのづから國語には國語の特性がある。音節の關係でも、語詞の順序でも、その細密な点に、却つて著しい特性のあらはれが見出されるのである。今、それ等の一々の点を細論する餘裕を有たないから、こゝには單に一二の例を擧げておくに止めるのである。

まづ國語の音節が開音節であり、單語が多音節語であるといふ關係から、わが國語には母音が非常に多い。母音が多いといふことによつて國語は非常に輕快に聞える。それは何故であるかといふに、母音の發音の際には、氣流は、口腔内に於て何等の妨げを受けない。子語の發音の際には、多くの場合に於て、喉頭部から出て來る氣流の通路が、口腔内で、或は閉ぢられ、或は狹められるので、氣流がその閉ぢられたのを推破つて出るか、その狹められた場所を摩擦して出るかによつて、種々の音が生ずるのであるから、子音は、その感じからいふと、何となく耳ざはりな点がある。重苦しいやうな感じがする。母音には、すらすらとした感じがあり、子音にはひつかゝるやうな感じがある。そこで、母音の多い言語は、いか

にも輕快にひゞき、子音の多い言語は、いかにも晦澁に聞える。ヨーロッパの言語でも、イタリヤ語とスウエーデン語や、デンマーク語とを比較してみると、一方は輕快であり、一方は晦澁である。これもイタリヤ語には母音が多く、イタリヤ語の音節が開音節である故であり、スウエーデン語やデンマーク語には子音が多い故である。然るに、母音の多い國語、開音節の國語は、輕快ではあるが單調である。何故單調であるかといふに、同じやうな母音ばかりが常に繰返されるからである。わが國語の如きものにあつては、概していへば、子音と子音との結合が許されてゐないので、音節は常に母音もしくは一子音と母音との結びついたものであるから、母音の繰返される度數が極めて多い。したがつて、全体が非常に單調に聞える。わが國語が變化に乏しいといはれるのもかういふ点からである。

わが國語に母音が多く、その音節が開音節であるといふことは、助詞や助動詞の融合を容易ならしめる。英語などの助動詞や前置詞は、いかにも英語が分解的であることを示すに足るほどに他の言語成分から切放されてゐるが、國語の助詞や助動詞は、名詞や動詞に對してよく密着してゐる。やゝもすればそれが一種の語尾變化であるかのやうに見られるくらゐである。この特性は複雜した語法關係を、別に他の成分を借りないで、助詞や助動詞を結びつけただけであらはすといふ樣式を發達せしめたものなのである。敬意をあらはすに多くの助動母詞をかさねて、一層鄭重な待遇關係を示すといふやうなこともかうして發達して來たのである。

かういふ風な、本質的特性といふべきものは、前にも述べたやうに、わが民族の形成時代に形成されたものであるが、いかにして各民族がそれ〴〵その國語上の特性を發達せしめるに至つたかは容易に論定することが出來ない。抽象的にこれを說明する場合には、大体の解釋はつく。元來國語といふものはその言葉を用ゐる國民なり民族なりの言語精神の發露であり反映であるから、これは民族性國民性と關係を有つてゐるのである。民族性國民性を形成するのは、その四圍の自然、生活の狀態、文化の傳統の力であるから、溫和な自然にはぐくまれてゐるものは、おのづから溫和な性情を養ひ得るが、酷烈な自然の中に育てられるものは、おのづから酷烈な氣象を受ける。山には果實があり走禽があり、海には魚介あり、海藻あり、生活に辛勞の少い土地の民族はおのづから快活であり悠長である。之に反して生計の資を得るに惡戰苦鬪を試みなければならない地方の國民は、その性情が猛進的であるか、さうでなければ萎縮的である。この關係は言葉の上にもあらはれて來る。かういふ風に說明すれば、言語上の特性はその言語を用ゐる民族なり國民の特性を形成する力の間接の影響をうけるものであるといふことになる。然し或民族、或國民が、どうして或種の言語上の特性を形づくるに至つたかといふことは、この說明では明らかにされ得ないのである。それも、簡單に解釋される場合が無いではない。例へば、氣候の溫和な、環境の平靜な地方に住する民族は、開口音たる母音を多く用ゐる傾向がある。さういふ地方の住民は、性情も快活であるから、口を開いて發音する音を多く用ゐるやうになるのである。感動詞の如きものは

最もよく言語上の特色をあらはすものであるが、イスパニヤやイタリヤのやうな南方の民族の感動詞には母音が多いが、北方のチユウトン民族の感動詞には子音が多い、わが國語では、母音のうちでも最も廣く口を開いて發音するア音が感動詞に多く用ゐられてゐる。「あゝ」「あはれ」「あなや」の如き例を見てもそれは明らかである。此の如き類の現象は、氣候風土等の自然の及ぼす影響として、その經路も比較的容易にたづねられるけれども、何故にわが國語などの語詞排列の順序が主語客語述語といふやうな順序になるかといふやうな問題になると、これは、さういふ環境關係以外に於て他に種々の原因があらうと思はれるけれども、それは容易に明らかにされない。もとより言葉といふものは單語が本來の單位となるべきもので無く、一のまとまつた文（センテンス）が、われ〳〵の思想の單位であつて、それが分解されて一々の單語となるのであるから、われ〳〵が或まとまつた思想を一の文としていひあらはす際に、まづ第一に主語を、次に客語を、次に述語をといふ風に、例へば外國語の學習の場合に單語の置場所に苦心するやうに、一々考へてやるわけでは無い。われ〳〵の考へ方の順序が自然さうなのであるから、單語の順序も自然さうなるのである。かういふ順序は朝鮮語、滿州語、蒙古語などでも同樣であり、語族のちがふ西藏語、ドラービタ語などでもさうであるが、これはどういふ關係からさうなるのであるか、ヨーロツパの言葉や支那語などの順序とちがふのはどういふわけであるかといふやうな問題になると、到底解決はつかないのである。たゞ、かういふのが、此等の言葉の特性であると見る外はない。

つまり、國語の特性と國民や民族の特性とは、相互に影響を與へるものである。國民や民族の特性は國語の上にあらはれて來るものであり、國語の特性は國民や民族の性情を支配するものである。けだし、言葉といふものは、一方に於てそれがその國民、民族の精神的所產であると同時に、また一方に於て、その國民、民族の思考を陶冶し訓練する力を有つてゐるものであるからである。されば、われ〳〵は、いかにして言葉の或特性がその國語に發達したかといふやうな經路について討究を試みるよりは、むしろその特性を特性として、その特性が國民や民族の性情とどういふ關係を有つかといふ、結果の方面について考察を試みる方が、より多く賢明であり、より多く興味あるものと考へる。英國の言語學者スウ井ートが、ギリシヤ語とラテン語とを比較して、

ギリシヤ人とギリシヤ人ほど智的で無いローマ人との間の相違は、明かに此等兩國民の國語にあらはれてゐる。實際的氣質を有つてゐるローマ人は、窮窟な具象的の語彙で滿足して居て、思想の表現も用向の足りる程度の簡單なものを目的としてゐた。これがためには、表現の撓性（フレキシビリティー）並に意義の區別を犧牲にしてもよいと考へたのである。ローマ人は、かういふことが、傳統的の曲尾的組織と兩立し得るものであり、又或程度までは調和し得るものであるといふことに氣がついたので、これを發達せしめて、措辭法の上から見ればよく整つてゐるといふべき曲尾語の一種を作りあげたのである。然るに、活動的のギリシヤ人は、その抽象的思索を表現するために、撓性（フレキシビリティー）を有つてゐる明快な語詞構

成が必要であつた。純粹な曲尾的組織は、この必要に應ずるには不適當であつたので、ギリシャ語には後期アリヤン語に發達したやうな分解的組織の萠芽を見るに至つた。ギリシャ人の分解的天才は、ギリシャ語のパーテイクルの上に最も明らかにあらはれてゐる。然しまた、パーテイクルが發達し過ぎたといふことは、その智的氣質の弱点を示してゐるものである。といひ、猶、支那語はローマ人の簡潔とギリシャ人の愛好した、表現の明快及び温雅を併せ有してゐると說き、支那人の語學的本能は非常に抽象的概括的である。而して此の傾向に論理的明快を欲する念が加はつて、多數のパーテイクル（虛字）を發達せしめたと說いてゐるが、かういふ風の見方は、よく言葉の特性と國民性との關係を明らかにし得ることと考へる。

三

國語の本質的特性については、前節に於て、その主要なものの二三を擧げて說明したことであるからこゝには、第二次的特性の二三について說明して見よう。

第二次的特性といふのは、前にも述べたやうに動的性質のもの、活動的のものである、即ちわが國民は言葉の上に於て、どういふ風に思想をあらはして行くか、思考上の區別を言葉の上にどういふ風にあらはしてゐるかといふやうな方面の事象に關するものである。かういふ方面の考察から、私は次のやうな二三の結果を擧げることが出來る。

まづ第一に、わが國民は非常に抽象的概括的の性情を有つてゐる國民であるといふ觀察が下される。他の方面に於てもこのことは認められるが、言葉の上にこれが著しくあらはれてゐる。例へば、單語の上に於て、われ〳〵は多く抽象的概括的の言葉を發達させてゐる。「かね」といふ語は、金、銀、銅、鐵等の金屬類はもとより、金屬製のもの、もしくは、これに關係あるもののすべてをいひあらはす語として用ゐられてゐる。鐘も曲尺も鋏漿も、貨幣も（金屬製でないものまでも）ひとしく「かね」とよばれるもし、強ひて區別する必要のある場合には、「こがね」「しろがね」「あかがね」「くろがね」「つりがね」「かなじやく」といふやうな複合　を用ゐてゐる、さうでなければ金、銀、銅、鐵といふやうな別の語でいひあらはす。しかし、鐘の如きは「かね」か「つりがね」かだけである。別に新しい國語を造り出してゐない。Geld,Silber,Kupper,Eisen,Glocke のやうな一々の語は出來てゐない。「かは」でも英語では River, Stream, Brook　といふやうな一々の語があるけれども、國語ではひとしく「かは」である。もし必要があれば、「こがは」「たにがは」「おほかは」「ほそたにがは」「はやかは」といふやうに別の言葉を結びつけてあらはす。「ひかる」とか「をかし」とかいふ動詞や形容詞でも、それ等の語はいろいろの場合に用ゐられて、その場合場合に應じてそれ〳〵特殊の意義に用ゐられるのである。「みる」といふ語なども、區別していひあらはす必要のある時には、「おもひみる」「かんがみる」「うしろみる」「こゝろみる」などのやうに他の語を結びつけてその用を便じるが、一般的には「みる」といふ語ですませるの

である。かういふのは、國語では、前にも述べたやうに、複合語の構成が自由であるといふことが大なる關係を有つてゐるので、種々の微妙な差異も、他の語を結びつければこれをいひ分つことが出來るために、一つ一つの場合に應じる言葉が發達しなかつたのでもあるが、また一方には、國民の抽象概括を好む性情が有力な原因となつてゐるのである。このことは、性（ジエンダー）、數（ナムバー）の關係に於て更に著しくあらはれてゐる。國語に性や數を示す形式の缺けてゐることは、ラテン文法の形式を尙ぶ人々から見れば、大なる國語の弱点として非難されることであるが、何も外國の語法と一致しないからといつて、敢てこれを國語の缺点と見るには及ばないのである。國語に性、數の觀念が形式的にいひあらはされないのは、やはり抽象概括を好む國民性から來るのである。性や數の或特殊的の關係を言葉の上にあらはすのは、言葉を具体化するものであるから、「をんどり」「めんどり」のいづれをとはず「とり」といふ語でそのすべてをあらはし、單數複數の別なく、複數の場合でも、「ひと」「くに」といふ語でこれをいひあらはしてゐるのである。もし必要があれば、「をん」とか「めん」とかいふ別な語を添へ、「ひとびと」「くにぐに」のやうに同語を重ねて示すといふやうな方法をとるのが普通になつてゐる。自他の區別が單語の上に明確でないのもやはり同樣である。西洋文典の崇拜家は、國語の動詞を自動詞他動詞に分つて喋々と論じてゐるが、どうしても徹底的にこれを解釋することが出來ずにゐる。實際國語の動詞の性質を吟味して見ると、動詞そのものに自他の區別は有してゐないのである。自動詞的に用ゐられるとか、他動

詞的に用ゐられるとかいふやうなことはいひ得られるが、それは文全体の關係についていひ得るのであつて、これを動詞そのものの本來の性質と見ることは出來ないのである。

これもやはり、抽象概括を好む國民性のあらはれたもので、自他の區別を言葉そのものの上に發達させなかつた結果である。時の觀念が語法の上に明確にあらはされないのも同一の理由によるのである。今日の教科文典の著者などは、一々の時の關係を細かに論じてゐるけれども、國語そのものの特性について見れば、今日の多くの人々が時の觀念上の區別をあらはすものと見てゐるもの、例へば、「つ」「ぬ」「たり」「けり」「き」の如き助動詞の使用上の區別も、むしろ叙述觀察の態度に關係あるものと思はれる。

第二の特色として擧ぐべきは、わが國民は頗る樣式の單純化を好む國民であることである。これを動詞形容詞の發達史の上について見るに、極めて古い時代に於ては、動詞も形容詞も共に同一活用の樣式をもつてゐたものと信ずべき理由がある。然も動詞の樣式も極めて簡單なものであつた。然るに、それが、奈良朝から平安朝の初期にかけて、漸次發達して複雜なものとなり、動詞は四段、上一段、上二段下一段、下二段、加變、佐變、奈變、良變の九種となり、形容詞は久活、志久活の二種となつた。これは、文化の發展に伴なつて、言葉の樣式が文化して來た結果であるが、樣式の單純化を好む國民は、かういふ複雜な樣式を漸次單純化する傾向を生じ、室町時代頃からは、上二段は上一段に、下二段は下一

段に奈變良變は四段に、佐變は、或ものは四段に、或ものは下一段に、或ものは上一段にといふやうにいづれも統一されるやうになつた。形容詞も「く、い、けれ」の一つの活用となるに至つた。係結の形式が國語の上に失はれるやうになつたのも、やはり單純化を好む性情から出てゐる。かういふ風に、一旦發達した樣式をも更に單純化させるといふのは、かういふ性情が強い根ざしをもつてゐるといふ一の證左となり得るものである。

第三に、前項に述べた單純化を好むといふ性情は、これが對外關係に發揮されれば、同化の力となつてあらはれる。わが國民が同化的の強い力をもつてゐるといふことは、言葉の上にも著しくあらはれてゐる。史前時代、原史時代はしばらく措いて問はず、有史時代になつても、朝鮮支那の文化の輸入と共に、それ等の地方からの言葉の輸入は頗る盛であつた。最初の時代の文化の權力を握つてゐたのは、海外から歸化して來たもの、もしくはそれ等の子孫であつた。文化の主權が邦人の手に移つてからも、外來文化の威力は容易に衰へなかつた。したがつて、さういふ時代に於ては優秀な文化を有してゐた朝鮮支那の言語は、非常な勢力があつたのである。平安朝の初期になつても、漢音吳音の學習がやかましく奬勵されたのを見ても、當初の時代の趨勢はほゞ推想されるのである。しかし、われわれの祖先は外國語を輸入して國語の語彙を增加せしめるに當つて、多くはこれを國音化し、國語化してゐるのである。わるくいへば、わが國民は、往時から、外國語の學習には甚だ不適當な國民であつて、語學的才能には

乏しいのである。よくいへば、外國音や外國語を輸入するに當つて常にこれを我に同化せしめるのが、古今を通じて、わが國民の常であるといへる。この点は、單に古の朝鮮語や支那語との關係についていひ得るのみではない。後世の支那輸入の語彙、さては慶元以來の西洋より輸入された多くの語彙についても多くの例證をあげることが出來るのである。

第四に、わが國語には階級思想の反映と見るべきものが著しく發達してゐるといふことは、長い間の歴史的關係に本づくものではあるが、また國民性の一面を語るものといふことが出來る。前に述べたやうに、わが國民は、一方に於ては抽象概括を好む國民であり、樣式の單純化を好む國民である、然るに一方に於て、言葉の上に階級的の差別の著しくあらはれてゐるといふのは、矛盾であり撞着であるやうに見える。然し、この兩種の性情は對立し得ないものでは無い、あたかも、自由の思想と秩序の觀念が兩立し得るやうなものである。階級思想といへば語弊があるけれども、言葉づかひの上に尊卑のつかひ分けをするといふことは、長い間の歴史的敎養によつてわが國民の一特性となり、それが國語の特性の一となつてあらはれて來てゐる。武家時代に於てはそれが極端にまで發達して來た。現代に於ては社會組織の變化と共に、漸くそれが單純化される傾向を生じてゐるのも、また看過することの出來ない國民性の閃きである。

第五に、わが國民は言葉に對して一種の神秘的な思想をもつてゐる。古代人は、言葉そのものに一種

靈妙不可思議な力があつたと考へてゐた。その神秘的靈力を言靈と名づけ、わが國を言靈の幸ふ國といつてゐた。祝福する場合にも呪詛する場合にも、言葉の力によつてその目的を達するといふのが古代人の考であつた、その例は多いが、一二の例を擧げると、顯宗天皇紀に見えてゐる室壽の詞の如きは祝福の例である。神代紀に見えてゐる、天神が返矢を發せられる時に、「天稚彦この矢にまがれ」といはれ彦火火出見尊が火闌降命に鈎を渡される時に、海神の敎にしたがつて貧鈎といはれた如きは、呪詛の例である。惡い事を善事に言ひ直すといふことも古くあつたが、これも言葉の力によつて凶を吉に轉じ、禍を福に轉じ得るといふ思想から起つて居る。萬葉集卷五の好去好來歌に「言靈の幸ふ國とあるのも言葉にさういふ靈妙な力があり、その力の著しく發揮される國であるといふ意で、それであるから「つつみなくさきくいましてはや歸り來ね」といふ言葉で遣唐使を祝福してゐるのである。同集卷十一に「言靈の八十のちまたに夕占問ふ」とあるのも、言葉に不思議の力があると解してこそ、その神秘な靈告をこれによつて窺ふ意味がわかるのである。天奇護言とか神賀詞とかいふ類も、皆言葉に靈力のあることを認めたものなのである。かういふ思想から轉じて、中世には忌詞といふものが出來て來た。神域で佛敎關係若しくは汚穢關係の語を口にするを忌んで、佛を中子といひ、經を染紙といひ、打を奈津といひ、血を阿世といふ類の齋宮の忌詞の如きものがこれであるが、更に後世になつては、衰日を德日といひ、病氣を歡樂といひ、凶事を吉事といふやうな、換言的のものも生じて來たが、更にまた、「切

る」を「つぐ」（例へば「臍緒をつぐ」）「歸る」を「開く」（婚禮の席などに）「すゞり箱」を「あたゝ箱」、「なし」（梨）を「ありのみ」といふやうな類も出來た。かういふ類のことが、相當に社會に行はれてゐるといふことは、わが國民の迷信的性情を裏書するものであるといへる。

第六に、わが國民が輕妙な洒落好きの國民であることは、國語に同音異義の言葉の多いのを利用して、さま〳〵の遊戯的分子を文學の上に加味したことによつても知ることが出來る。懸詞とか緣語とかいふものは、古くから文學に用ゐられてゐて、何人もよく知つてゐるところのものであるが、これ等は、明らかに、國語の特性に同音異義のものが多いのと、國民が洒落を好む性情がよくこれに適合したためであるといへる。後世になつては地口、語呂合などといふものも出來たが、それ等は全く一種の駄洒落である。

以上述べ來つた諸種の点は、たゞ思ひ浮ぶがまゝを順序なく擧げて見たに過ぎないが、わが國に於ける文字の使用の上にも、大体これと同じやうな傾向を見ることが出來る。

四

われ〳〵の祖先が、元來意字の性質を有つてゐる漢字から、片假名平假名のやうな音字を發達させたといふことは、實にわが國民が立派な文化的能力を有つてゐることを證明し得たものといふことが出來る。猶また假名の弘通後、さまで久しくない時代に於て、平安朝の立派な假名文學の發達を見るに至つ

たといふことも大なる驚異である。漢字から假名を發達させたと同時に一方に於ては、漢字を使用する上に於ても、われ〳〵の祖先はあながち漢字の本國に於ける使用法を金科玉條として尊奉しなかつたのである。漢文學を主として修めた學者達は別として、一般社會の人々は、漢字を自由に驅使して日常の用に供したのである。音に於ても訓に於ても、かなりこれを日本化したのであつた。必要に應じては新しい文字さへも造り出したのである。わが國の造字でかなり古くから行はれてゐるものをあげてみると俣、働、凧、凪、粍、峠、榊、栃（しきみ）、毟（むしる）、碇（いかり）、躾（しつけ）、込（こめる）、軈（やがて）、辻（つじ）、問（とへ）、鴫などがある。かういふ造字は、現代までも行はれて、粉（デシメートル）、糎（センチメートル）、粍（ミリメートル）、粁（デカメートル）、粨（ヘクトメートル）、粁（キロメートル）などの如きものも出來てゐる。かういふ風に外來の文字を應用して自家の使用に適應せしめて行くといふことについては、わが國民はかなりすぐれた才能を有つてゐるといへる。

然しまた、わが國民は、抽象概括を好み單純化を好む國民であるから、漢字の使用に於ても、意字たる漢字の原義については比較的無關心であつた。それであるから、「あて」字の使用はめづらしくないのである。文字とこれによつて書きあらはされるものとの間に、何等の結付さへあればよいといふやうな考から、所謂「あて」字といふものが盛に行はれ出した。「延喜」を「延木」、「參議」を「三木」、「萬里小路」を「萬利小路」と書くやうな、單に音の關係だけで別字を用ゐる類はいふまでもない。「楮」（かうぞ）を「皮龕」「紙層」と書くやうな、却つて面倒なのもある。意義關係から來てゐる。「向南」（きた）「毛

無」「草臥」「丸雪」「五月蠅し」「莫大小」「天鵞絨」の類、字訓の假用から來てゐる「淺猿」「荒增」「浦山敷」「鹿爪らし」「目出度」「矢鱈」の類の如き、隨分むづかしくもあり、面白くもある。

洒落好きの國民は、また「あて」字に於ても、遊戯的氣分を忘れない。「瓦落多」「劍突」「劍呑」「獅嚙着」「胡魔化す」「劍橋」「牛津」「倶樂部」の類はこれである。

こんな風に、わが國民は漢字についてさまでの執着を有たずに、自由にこれを用ゐてゐるが、一方ではまた、漢字の字面について穿鑿の興味をも有つてゐるのである。漢字で書きあらはれなければ、十分の意義が示されないといふやうにも考へてゐる。わざわざ「あて」字を用ゐるといふ心理はかういふ關係もあるのである。

× × × × ×

言語と文字にあらはれた我が國民性といふ問題は、その範圍が廣汎である。上に述べた所はたゞその一端に觸れてゐるに過ぎない。この方面の研究は、わが國の目下の急務である國語國字改善問題の解決にも多大の關係を有するものであり、猶論ずべき點は多いのであるが、それは他日の機會に讓つて、一先づこゝに筆を擱くことにする。

橘守部

安未太ももさは安末都てふこ
この語にて阿彌陀佛は即天津
神なり

（神道辯、全集、第二卷）